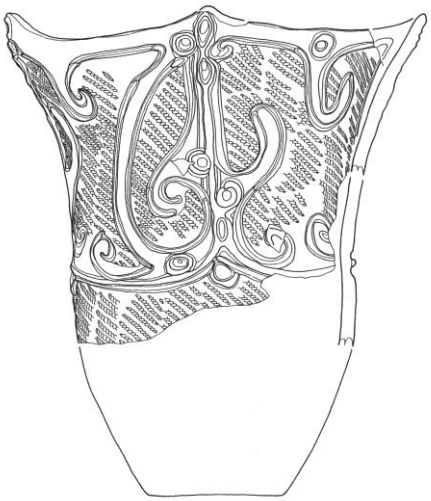
盛岡市遺跡の学び館所蔵考古資料図録Ⅰ

－昭和29年度陸前高田市門前貝塚発掘調査出土土器の集成－



岩手県　盛岡市遺跡の学び館　2009．3.

例　言

昭和 29 年発掘調査資料の再整理　昭和 29 年に江坂輝弥氏・吉田義昭氏・東登氏によって発掘調査が実施され、昭和 35 年に報告された陸前高田市門前貝塚発掘調査資料は調査終了後盛岡市中央公民館に保管されていた。しかし、長い年月の保管状況は必ずしも良好とはいえず、保管箱・袋類に記述されていた遺跡名や出土地点等は不明な状態であった。平成 7 年度に盛岡市中央公民館所蔵の考古資料が盛岡市教育委員会文化課によって整理されたが、前述したように一部の資料以外は不明とされた。平成 17 年度に盛岡市中央公民館所蔵考古資料が盛岡市遺跡の学び館に移管され、昭和 35 年に刊行された報告書を基に再整理を進めたところ、学史上でも重要な資料が「不明」とされた資料に数多く含まれていることが確認できた。

昭和 29 年に発掘された門前貝塚出土土器は、岩手県中央部から宮城県にかけて広く確認されている縄文時代後期初頭の「門前式土器」の標式資料でありながら、報告書刊行以来一部の資料を除き公開されることはなかった。しかし近年になり「門前式土器」の研究が進展するにつれ、当時の発掘資料の公開を求める声が高まり、対応手段として図録を作成する運びとなった。

門前貝塚出土資料の多くは遺跡名が注記されていなかったが、一括でコンテナ箱に収納されていたため容易に報告書と照合することができた。土器片には出土地点が朱書きされており、「６」・「５」・「４」「フ」等の文字があり、６・５・４などの数字は報告書との照合で貝塚の地点を表すものであることが判明した。「フ」については、報告書上では報告書で第六号貝塚第四区出土とされているものが多いことから「フ」ではなくフを逆さに見て「６」の略字であることが考えられた。

土器　土器は報告書の記述を参考に地点別に分けた。未報告資料については土器の注記を参考に地点別に分け、全ての破片を台帳にまとめ、台帳番号を改めて注記した。注記後に接合を行ったが、地点を超えての接合はなかった。また、割口が新しい土器については特に徹底した接合作業を進めた。その結果、注記のない土器もある土器と接合され、改めて出土位置を確認することができた。土器の多くは、昭和 35 年の報告書に掲載されているが、新たに接合されたことや、報告書ではスケールが無く実際の大きさが不明であったことから報告書未掲載資料と共に再図化することとした。昭和 35 年度の報告書に掲載され、今回の図録に収録されていない資料があるが、それらについては後日、遺跡の学び館ホームページ上で改めて紹介する。

土器図版　土器図版作成については、第一・五・六号貝塚の地点別に作成することとした。図版は器形・文様等で一応のレイアウトを行っているが、厳密に細別させたものではない。スケールは１：３で統一している。各貝塚の名称は、吉田報文では漢数字を使用しているが、本図録の図版ではアラビア数字を使用した。

資料整理は神原雄一郎を中心に佐々木亮二・佐々木紀子が行い、図録は神原が作成した。

Ⅰ　昭和 29 年の発掘調査

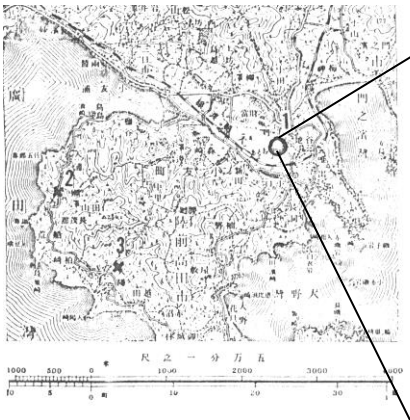
1　はじめに　　今回資料紹介する門前貝塚出土土器は、昭和 29 年に慶応大学江坂輝弥氏、岩手県産業文化館（現　盛岡市中央公民館）吉田義昭氏、岩手県立盛高等学校教諭　東 登氏によって発掘された出土遺物である。調査内容については吉田義昭氏によって報告されており、報文では縄文時代中期末から後期初頭にかけての貝塚であることを報告している（1960　「陸前高田市門前貝塚発掘調査報告」盛岡市公民館）。吉田氏報告以前は、出土資料の一部が江坂輝弥氏によって「小友式」として紹介され（1956　「日本考古学講座３　－各地域の縄文式土器　東北－」、調査速報も同氏により紹介されている（1958　「日本考古学年報７」日本考古学協会）。

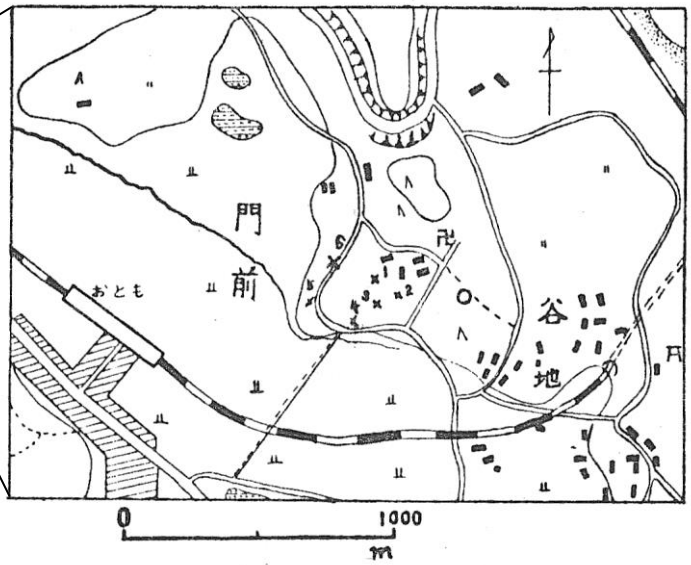
2　昭和 29 年の発掘調査　　発掘調査は前述したとおり慶応大学江坂輝弥氏を主体者に、岩手県産業文化館（現　盛岡市中央公民館）吉田義昭氏、岩手県立盛高等学校教諭　東 登氏が中心となって実施されている。その経緯や調査状況について江坂・吉田報文を引用・参考にまとめてみたい。

調査期間　昭和 29 年 7 月 10 日から 7 月 12 日の 3 日間。

調査原因　陸前高田市小友町門前地内の道路建設。

上記した道路建設は、当時既に進行していたらしく、本調査前の 6 月 24 日に江坂氏・吉田氏・東氏の 3 者が現地を実見しており、後に第六号貝塚とされる地点については「相当撹乱の痕跡･･･」と記述されている（工事範囲は第四号貝塚の一部、第五号貝塚の大部分、第六号貝塚の全域が該当する）。





第１図　門前貝塚位置図
（昭和 35 年報告書より）

第１図　門前貝塚

1 第一号貝塚　2 第二号貝塚　3 第三号貝塚
4 第四号貝塚　5 第五号貝塚　6 第六号貝塚
○ 門前東貝塚　▬ 住宅

調査区　当時、貝塚は第一～六号貝塚の 6 地点が確認されており（第１図）、その他にも台地の東で確認された小貝塚を「門前東貝塚」と名付けている。

調査は第一・四・五・六号貝塚で行われ、第六号貝塚を中心に調査が進められ、各調査区は下記のように分担される。

第一号貝塚・・・・・・・江坂輝弥

第四号貝塚第一区・・・・原 輝彦（慶応大学学生）

第二区・・・・吉田義昭

第五号貝塚・・・・・・・吉田義昭

第六号貝塚第一区・・・・江坂輝弥

第二区・・・・原 輝彦

第三区・・・・東　登

第四区・・・・吉田義昭

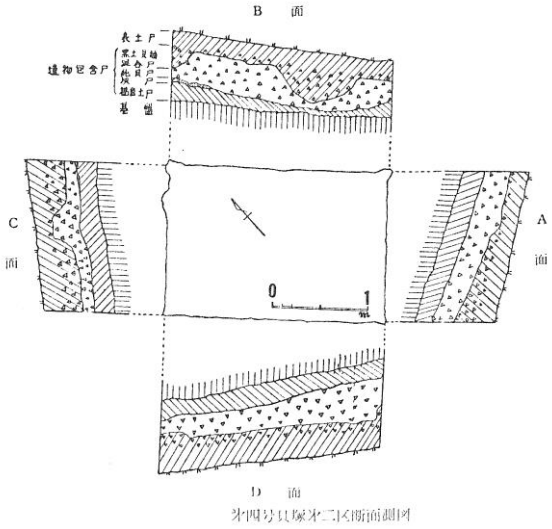
３　各調査区の概要　各調査区の概要は吉田報文で詳細が記載されているが、改めて各調査区の概要を吉田報文より引用して再記載する。

第一号貝塚・・・門前貝塚最大規模の貝塚で、ボーリングによる貝層範囲は約 400 ㎡と推定される。貝塚のほぼ中央に調査区が設けられる。調査区は 1m×0.5mで、層序は表土－黒褐色土（25 ㎝）、純貝層（45 ㎝）、貝層下の黒褐色土層で、貝層と黒褐色土との漸位層より第　図 1 の深鉢が出土したほか、土器破片、骨角器、貝層中より完全に近い犬の骨格 2 体分出土した。

第四号貝塚・・・地表に約 80～100 ㎡の範囲で貝殻片が散布する。第一調査区は 2m×1.5m、第二区は 2.3m×1.55m の調査区を設定する。

第一区では僅かな骨角製箆、突刺針類、土器片が出土。

第二区の層序は、表土、黒褐色土（混貝）土層、純貝層、灰層、黒褐色土の順で、土器片等の出土は少ないが骨角器・獣魚骨等が数多く発見された。



第２図　第四号貝塚第二区
（昭和 35 年報告書より）

第五号貝塚・・・極めて小規模な貝塚で、3.3m×3.3m程の規模。大部分が撹乱されているが純貝層と下層の黒褐色土の漸位層付近より深鉢形土器が 1 個体分出土。

第六号貝塚・・・台地鞍部西北斜面に形成された貝塚で、ボーリング探査で約 100 ㎡の規模であることが推定された。調査区は貝層が厚いと考えられた斜面下に沿い、南北 12m、幅 1.5mのトレンチを設けて 4 等分し、南側より第一・第二・第三・第四区とした。第一から第三区は撹乱されており、僅かに土器片、獣魚骨片が採

集された。第四区は貝層がほとんど存在しない遺物包含層で、第三区に接する東側隅に若干の貝層が拡がる。表土は約 30 ㎝でその直下 10～15 ㎝に土器片が重なり密集する包含層があった。

4　昭和 29 年発掘調査資料の所在　昭和 29 年における門前貝塚の調査状況は上記のとおりであるが、盛岡市中央公民館より移管された門前貝塚出土遺物の多くは、第六号貝塚第四区出土の遺物であった。これについては吉田報文の冒頭にあるように、吉田氏が担当した調査区のみの報告で、資料についても「盛岡市公民館保管」とされていることから他の調査区より出土した遺物についても同様に、各担当者の所属機関で保管されている可能性が高い。それを裏付けるように、吉田報文において第一号貝塚出土の土器は慶応大学考古学研究室蔵であることからも明らかである。

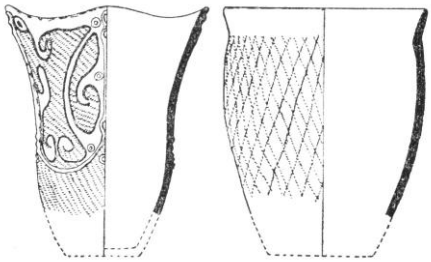
以上のことから、吉田によって報告された門前貝塚資料は、資料の散在という問題点はあるものの、限られた調査区・包含層からの一括資料として門前式土器を理解する上で重要な資料であることを再確認することができる。

Ⅱ　盛岡市中央公民館旧蔵の門前貝塚出土遺物について

1　門前貝塚出土土器の評価　昭和 29 年に実施された門前貝塚発掘調査は、当時出土例が少なかった縄文時代後期初頭の土器様相を知る上で重要な調査であった。

小友式（門前式）　昭和 31 年、江坂氏は『日本考古学講座 3』のなかで門前貝塚出土の土器を「小友式」として紹介している（第３図）。「小友式」は関東地方の堀之内 1 式に併行するものとされ、昭和 32 年に刊行された『「考古学ノートー先史時代Ⅱ」－縄文文化の編年的研究の変遷一覧表』では「門前式」と改称し、縄文時代中期末葉の大木 10 式に後続し後期初頭のものとして位置づけている。

しかし、昭和 34 年に刊行された『世界考古学大系 1 －日本Ⅰ』に掲載された「日本各地の縄文式土器形式編年と推定文化圏」では大木 10 式が後期初頭に編年され、大木 10 式は関東地方の称名寺式に併行させるなど変動がある。これは、推測の域を出ないが関東地方で堀之内 1 式よりも「称名寺式」が古く位置付けられたことに起因するのではないだろうか。



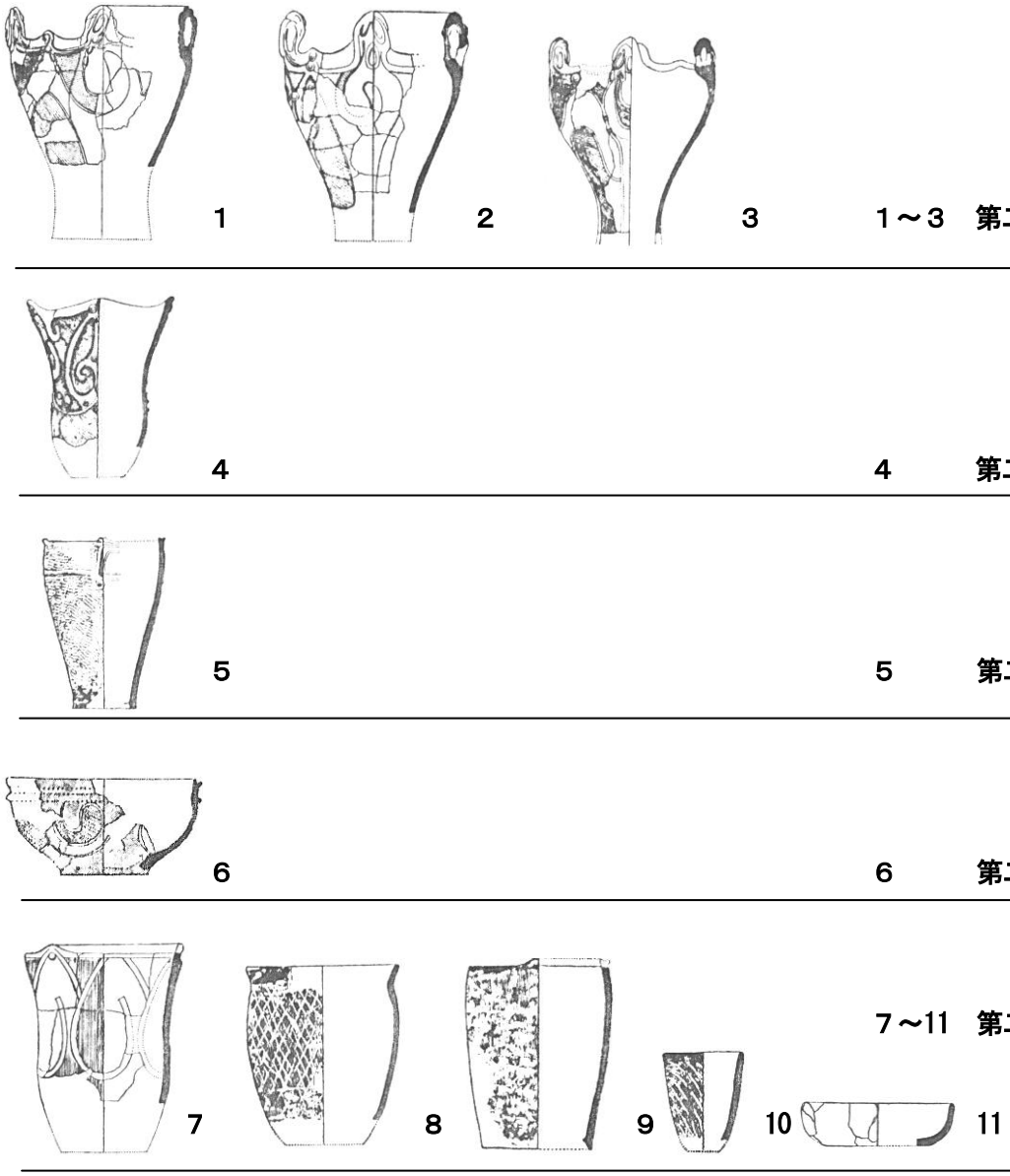
第３図　小友式（門前式）土器

称名寺式は当時、Ａ貝塚出土の土器を「称名寺式第一群土器」、Ｂ貝塚出土の土器を「称名寺式第二群土器」とし、「称名寺式第一群土器」を加曾利ＥⅢ式直後、「称名寺式第二群土器」を堀之内式に後続する土器と位置づけている（1960　吉田格「横浜市称名寺貝塚」東京都武蔵野郷土館調査報告書　第一冊）。報文中にもあるが、称名寺式第二群土器と門前貝塚出土土器を併行させたことにより、称名寺式第一群土器併行期の土器を「門前式」直前に位置？する大木 10 式と併行させた結果とも思えるのである。

吉田義昭氏による報告　昭和 35 年に吉田義昭氏によって昭和 29 年発掘調査の成果が報告され、「小友式」、「門前式」とされた土器群の全容が明らかにされた（1960　「陸前高田市門前貝塚発掘調査報告」盛岡市公民館）。吉田報文では、門前貝塚出土土器は大きく第一類・第二類・第三類に大別され第一類はａ・ｂの 2 細分、第二類はａ～ｅの 5 細分にされる。大別内訳は、第一類－中期末、第二類－堀之内式の古型式（称名寺式併行？）に併行、第三類－堀之内式的な土器である。

前述したとおり、主体となるのは第二類とした土器群で、江坂氏が「小友式」、「門前式」とした土器は吉田氏の第二類土器に含まれる。第二類土器の多くは第六号貝塚第四区より「相い重なり密集」した状態で出土しており、吉田氏はそれらを一括資料として見たようである。後に、熊谷常正氏によって「この二類として示された資料中、特にｄの中には大木 10 式の範疇に入るものもあり（例えば報文第七図版 7）それが後に若干の混乱を招く原因ともなった。」と評されるように吉田氏の調査所見に基づく土器分類は後の研究で積極的に評価されることはなかった。

吉田氏は報文の中で「小友式」・「門前式」の型式名を用いておらず、第二類として後に細分されることになる土器も含めて一括資料として扱っている。



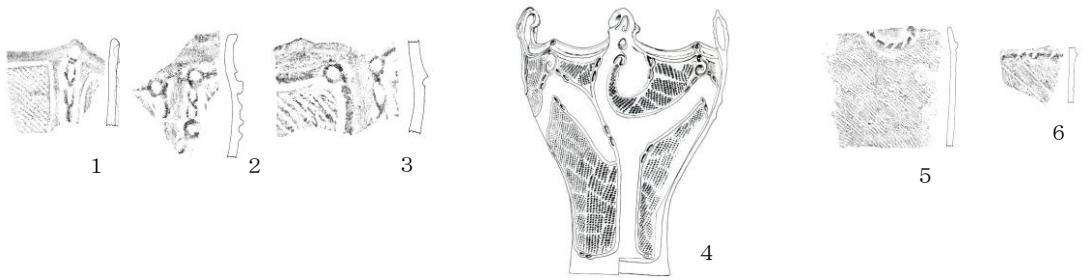
第４図　吉田義昭氏　門前第二類土器（１～11）
（昭和 35 年　「門前貝塚発掘調査報告」より抜粋）

及川洵氏による報告　　昭和 48 年、道路拡幅工事に伴う事前の発掘調査が陸前高田市教育委員会によって実施される。報告書は昭和 49 年に刊行され、報告者の及川洵氏は報文の中で門前式に触れ、それまでの門前式の認識として「これまでは連鎖状隆線文をもつ土器を中心に考えていた。しかしこの分類はあいまいで、時には誤りが生じていた。それは縄文中期末葉から後期初頭の土器が出土する遺跡では、門前式が少量しか出土していないのにもかかわらず、その前後の土器をも門前式に含めて分類してしまう場合があった。これは連鎖状文にとらわれすぎて分類したためにおこった誤りである。」と、それまでの門前式の認定基準ともいうべき特徴とその危険性を述べている。

「門前式」の特徴　　及川氏はこのとき門前式の特徴についても見解を述べており、この見解が後の「門前式」を示すようになる。及川氏の「門前式」について報文では次のように述べられている。「胴下部がしまり、胴上部がふくらむ器形で、口縁がやや内湾し、4つの中空把手と二段口縁をもつ。文様は隆起線をもって縄文を区画し、すり消し縄文をおこなっている。さらに連鎖状隆起線文をはじめ沈線によるＳ字状や逆Ｓ字状文、渦文などの文様が施されている。この時期の地文は斜縄文が多く網目状撚糸文はないようである。以上を門前式土器の主要な特徴であると考えたい。」

しかし考察において「門前式」の特徴を持つ代表的な土器を「第 19 図③」としているが、この土器は報文での説明で「出土片にもとづいて復元図化したもの・・・」であることから本当の標式標本として扱うには問題がある。

さて、及川氏による前述した門前式の特徴であるが、これは吉田氏の二類ａ土器、及川氏のⅡ群１類土器を指しており、土器組成全体を見通しての見解ではない。また、層位的な変遷を記しているが第一地点としたトレンチはＡ～Ｉまでの 2mグリッドで分けられ、さらにＤ・Ｅ・Ｆグリッドを拡張して調査しているが、「大部分の区が以前に調査された形跡が明らか・・・」であり、残存していたＨ・Ｉ区についても「遺物はほとんどない」状況であることから積極的に層位事実を求めれる地区ではないであろう。一方、第二地点では第５層から大木９式、４層下層から大木 10 式、上層から門前式が出土したとされる。そして４層より「竪穴住居」が掘り込まれ「床面上に５層の堆積」が確認されている。住居の床面及びピットからは「Ｉ群２類土器（大木 10 式の新形式）と第Ⅱ群１類土器（門前式）」が出土したと記述されるなど、層位を踏まえていながらも型式（文様）差を優先させた見解であることが推測される。なお及川氏は、報文の中で「大木 10 式の文様に隆線文および連鎖状文が施されているにすぎない。」とした土器を「前・門前式土器」。「次のモチーフが随所にみうけられる。」とする土器を「後・門前式土器」と呼び門前式を３細分している。しかし単個体を基準とした細分案は全体像に迫れるものではなく、むしろ吉田氏の門前第二類土器群こそ「門前式」の全体像に迫る資料と思われる。



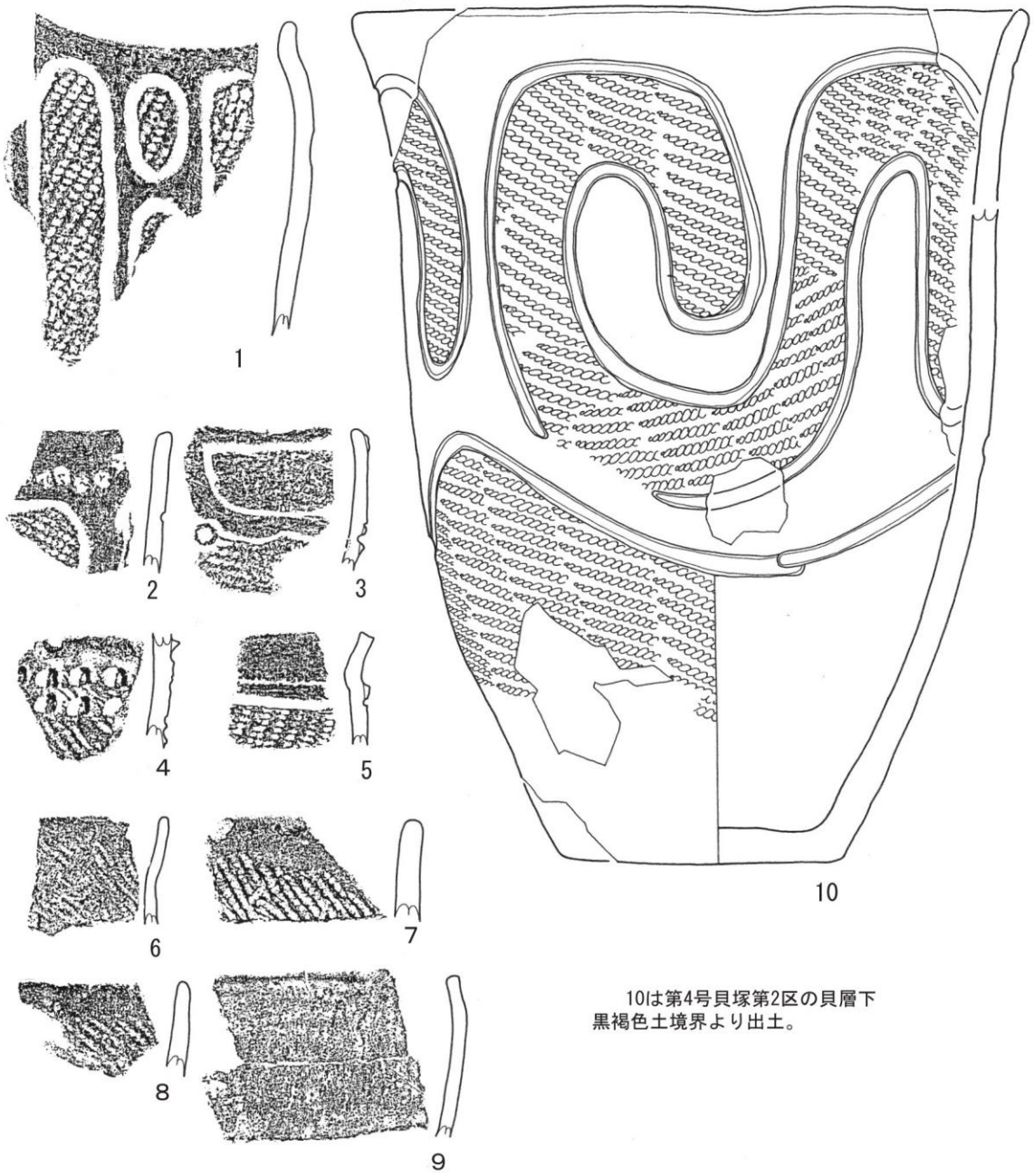
第５図　及川氏「門前式土器」（１～３『前門前式』、４『門前式』、５・６『後門前式』）

２　掲載土器について（第 6 図～第 15 図）

第四号貝塚出土土器（第 6 図 1～10）　1～9 は第四号貝塚の貝層中より出土したものとされる土器で、10 は「第四貝塚第二区の貝層下と黒褐色土層の境界から横倒しの状態」で出土したとされる土器である。貝層中からは 3・4 の後期初頭の土器片が出土していることから第四号貝塚は後期初頭以降の貝塚と考えられ、10 は貝層形成以前の土器とみることができる。10 は縄文時代中期末葉大木 10 式併行の土器と思われ、3・4 と 10 の関係は層位・型式的に矛盾しない状況を示している。

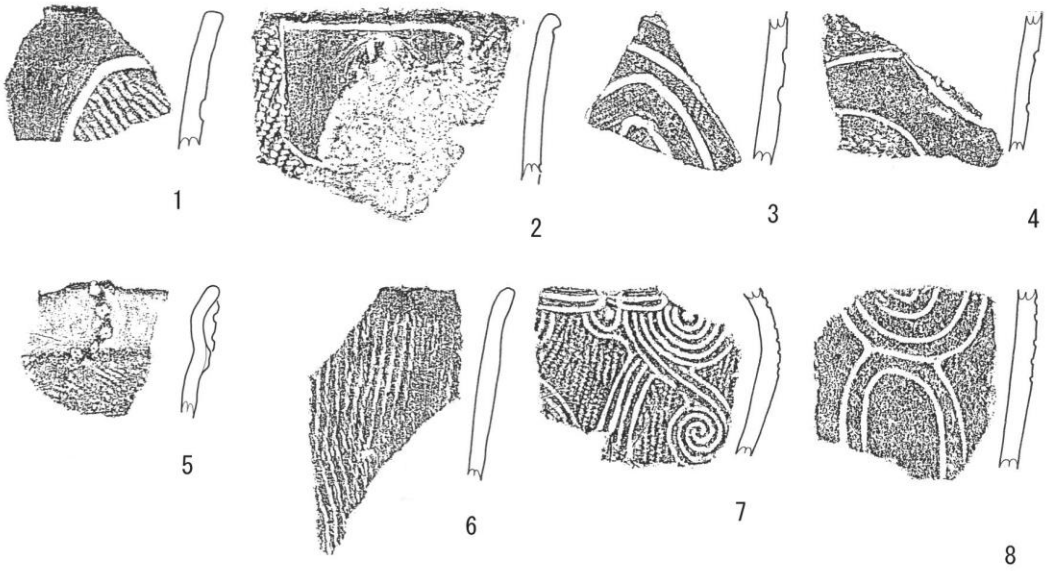
第五号貝塚出土土器（第 7 図 1～8）　吉田報文では「貝層は極く少部分に残存するのみで殆どの部分が表土と貝層の撹乱土層と考えられ下層に若干の処女層が遺存していたのみであった。」と記述される貝塚出土の土器で、本稿では未掲載だが地文のみが施される深鉢形土器が 1 個体出土している。

第六号貝塚第四区出土土器（第 8 図 1～第 15 図 74）　昭和 29 年の発掘調査で最も土器が出土した調査区である。吉田報文によると、表土直下の 10～15ｃｍの層間に獣骨を含む多量の遺物が含まれていたらしく、報告書に掲載されている遺物出土状況の写真からも相当量の遺物が出土したことが窺える。包含層は前述されているように 10～15ｃｍと薄く、さらに復元可能な土器が集中していたことから、これらの遺物群が同時期または近接した時期の所産である可能性が考えられる。

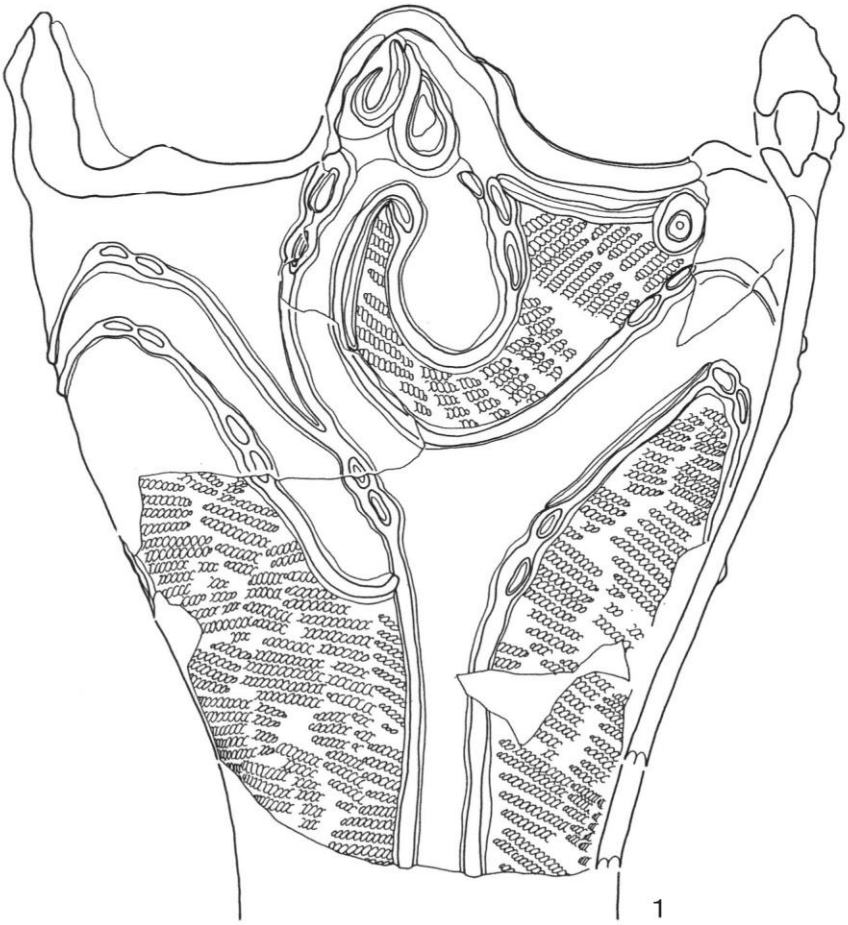


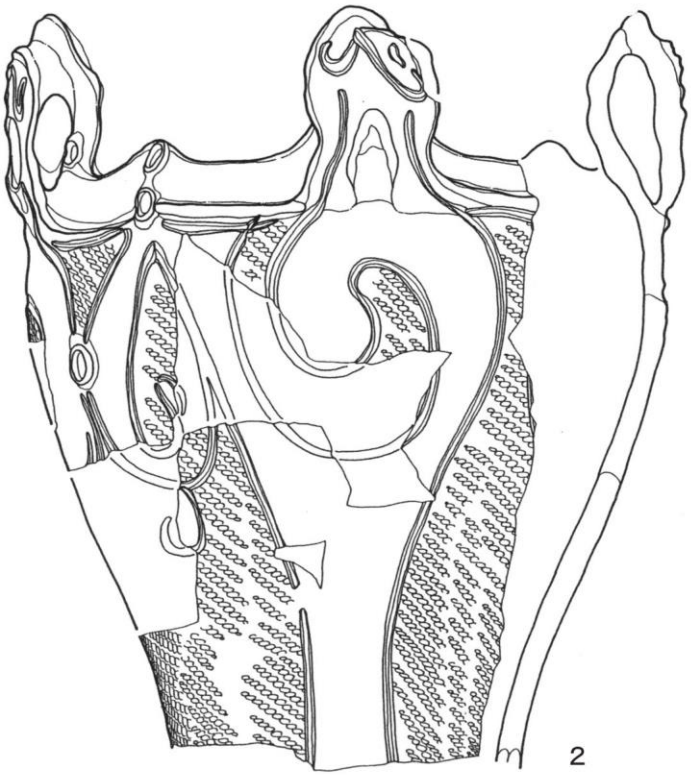
10は第4号貝塚第2区の貝層下
黒褐色土境界より出土。

第６図　門前貝塚第４号貝塚出土遺物　0　1：3　10cm

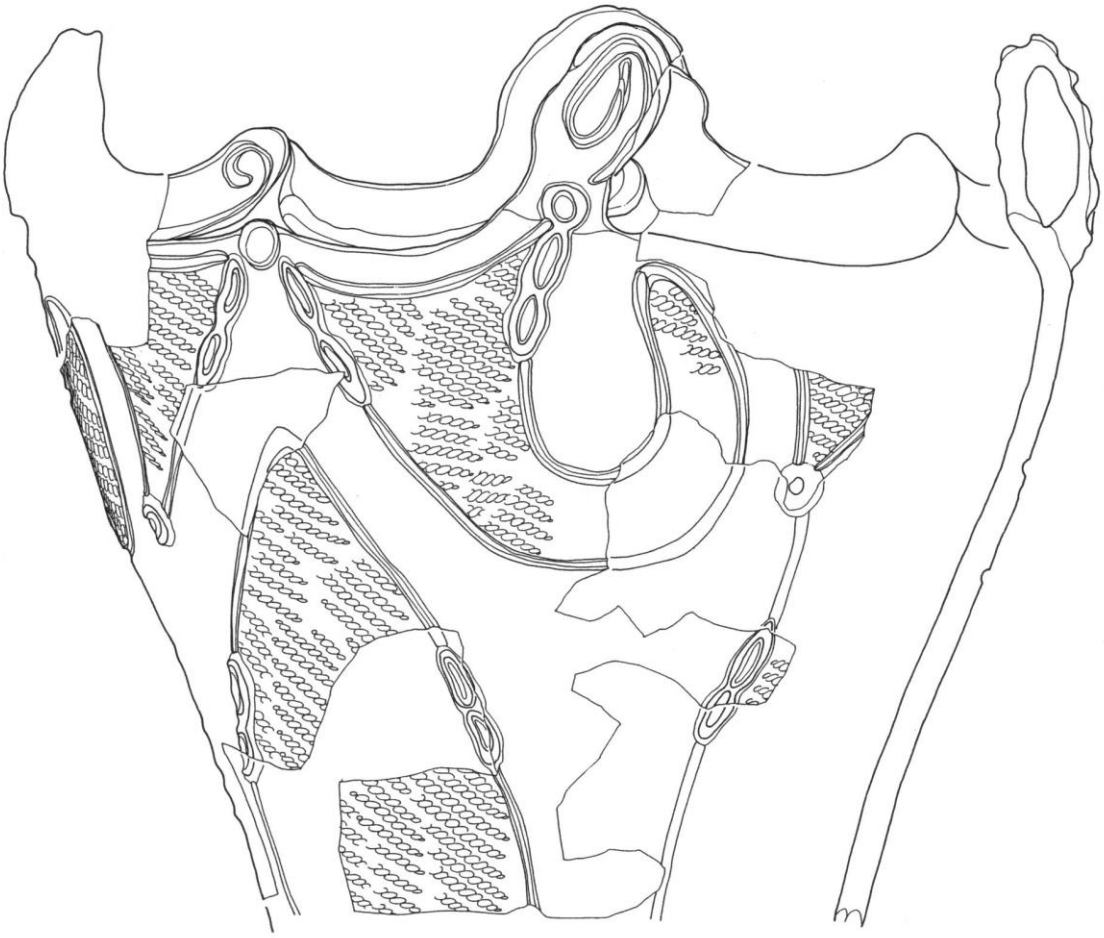


第７図　門前貝塚第５号貝塚出土遺物　0　1：3　10cm

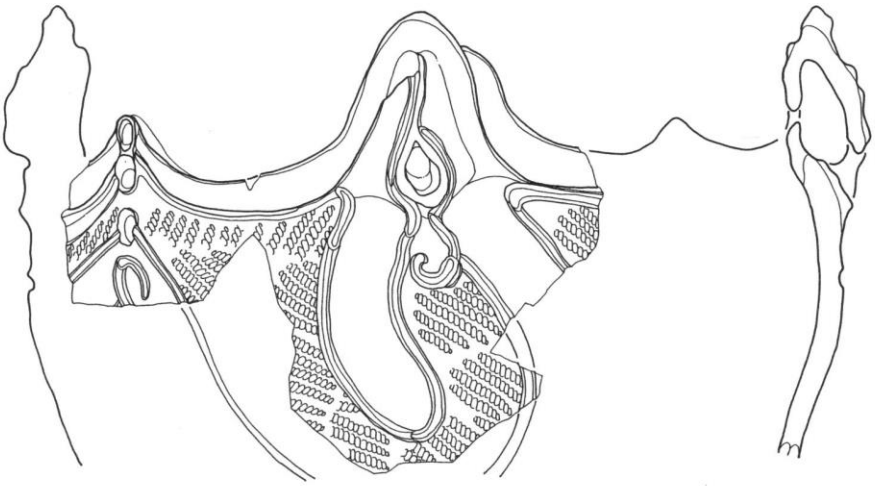




第８図　門前貝塚第６号貝塚第４区出土遺物（１）　0　1：3　10cm

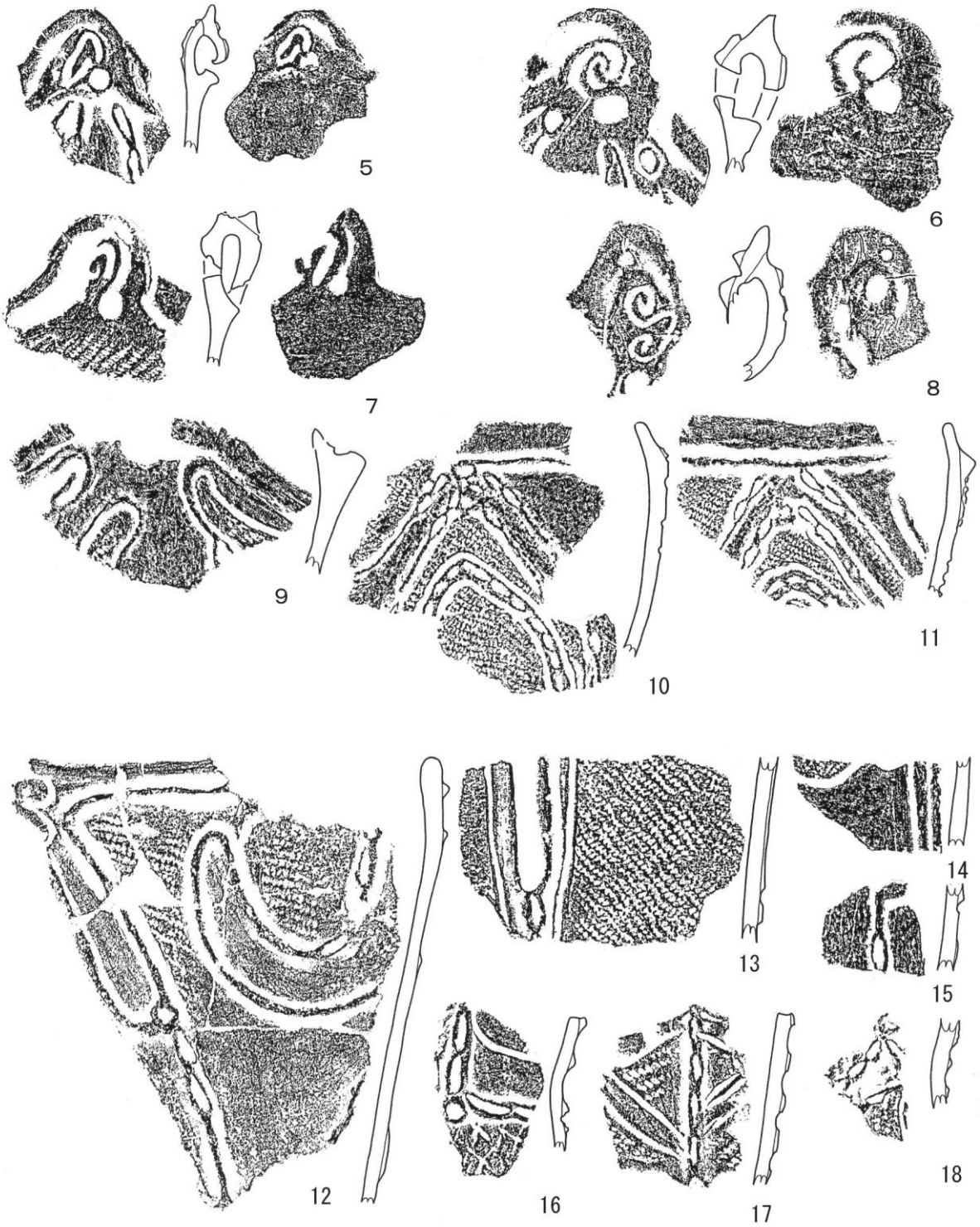


3

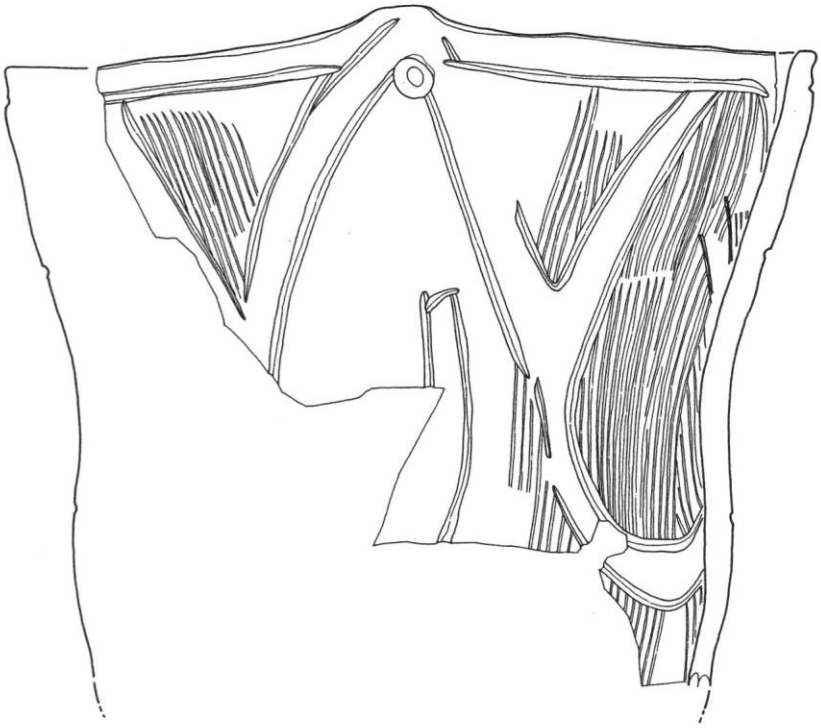


4

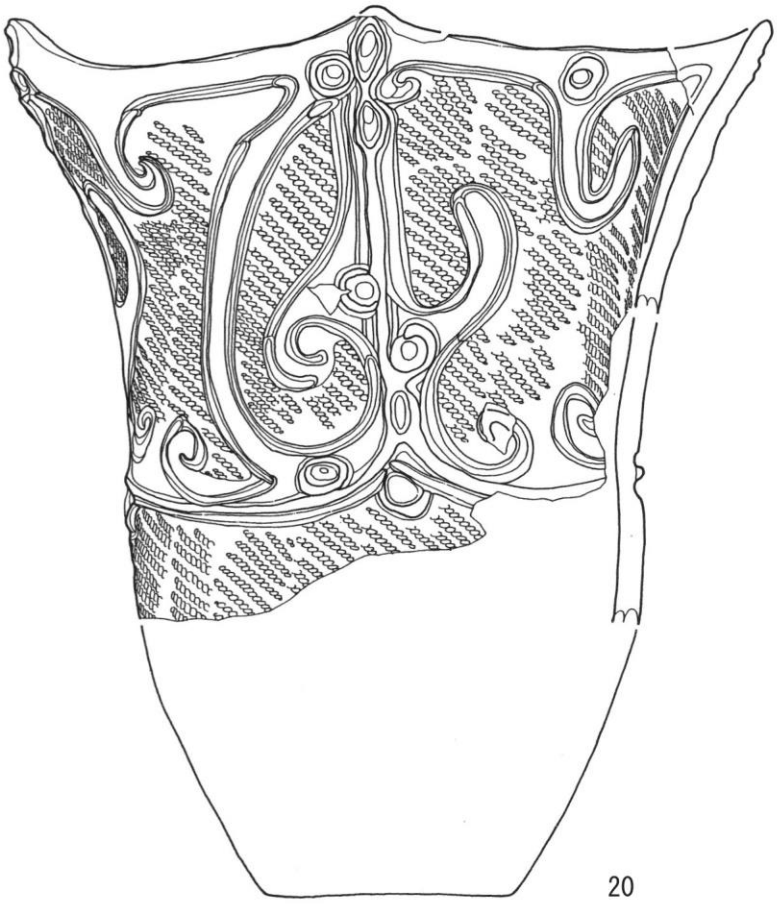
第９図　門前貝塚第６号貝塚第４区出土遺物（２）　0　1：3　10cm



第10図　門前貝塚第６号貝塚第４区出土遺物（３）　0　1：3　10cm

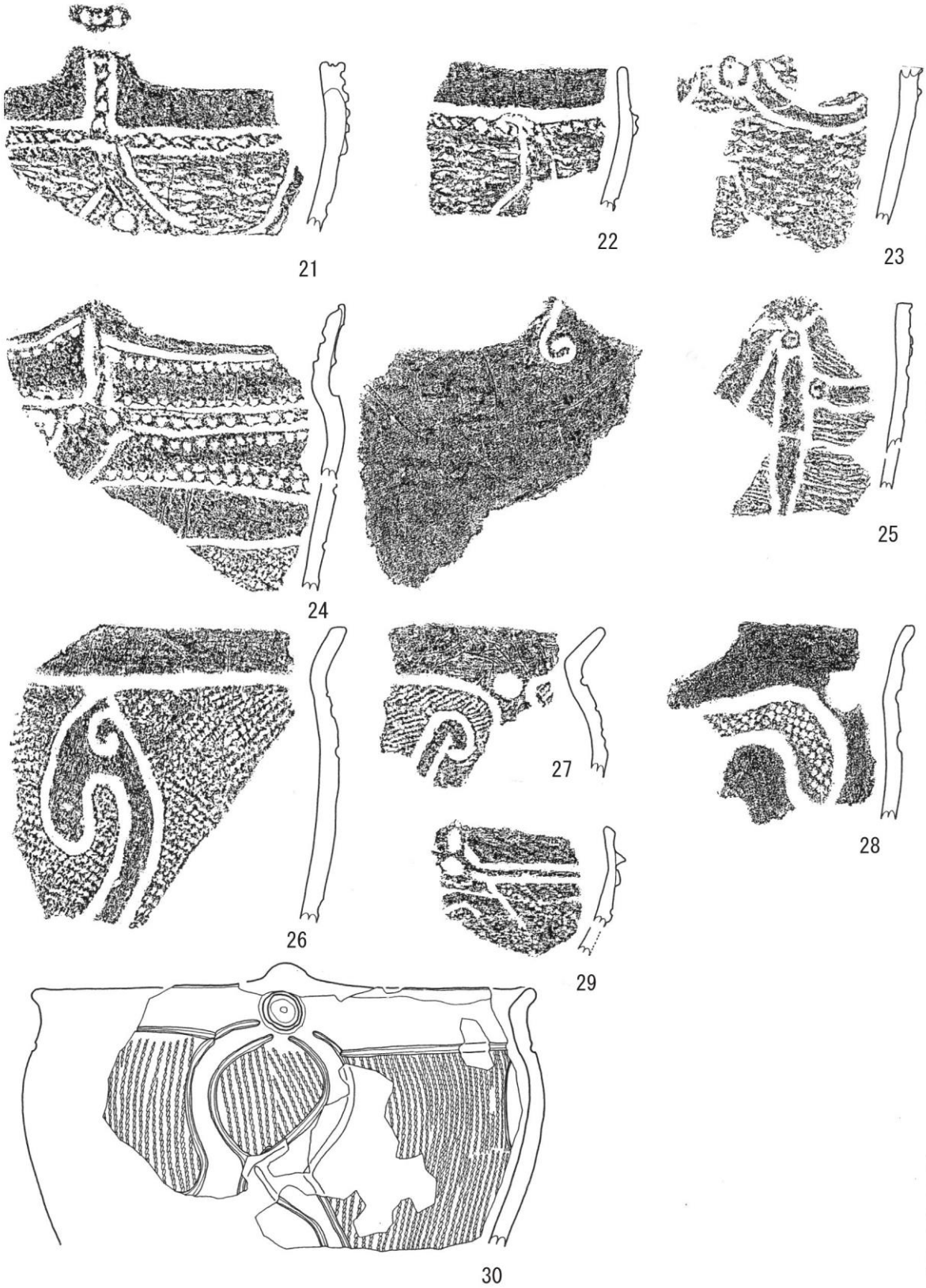


19

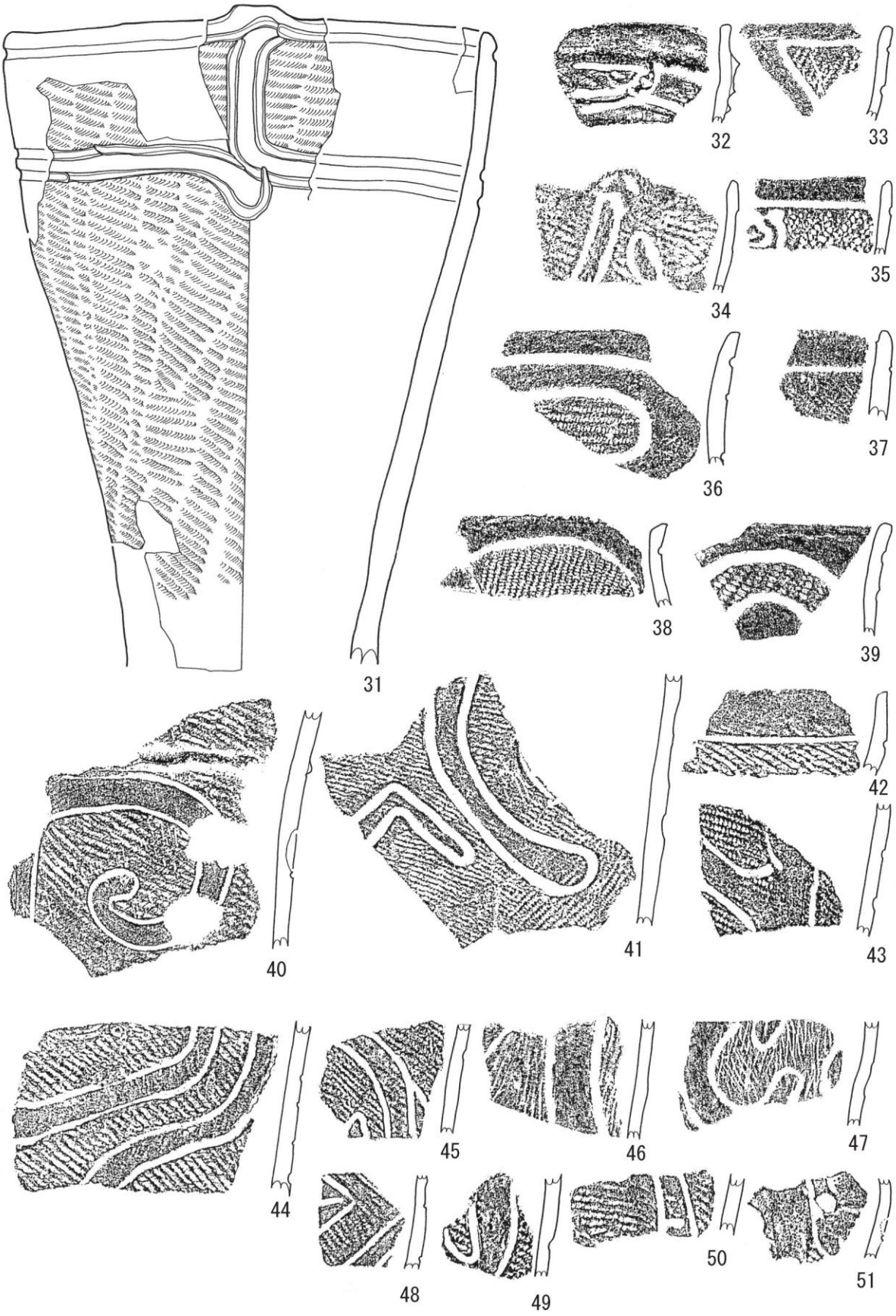


20

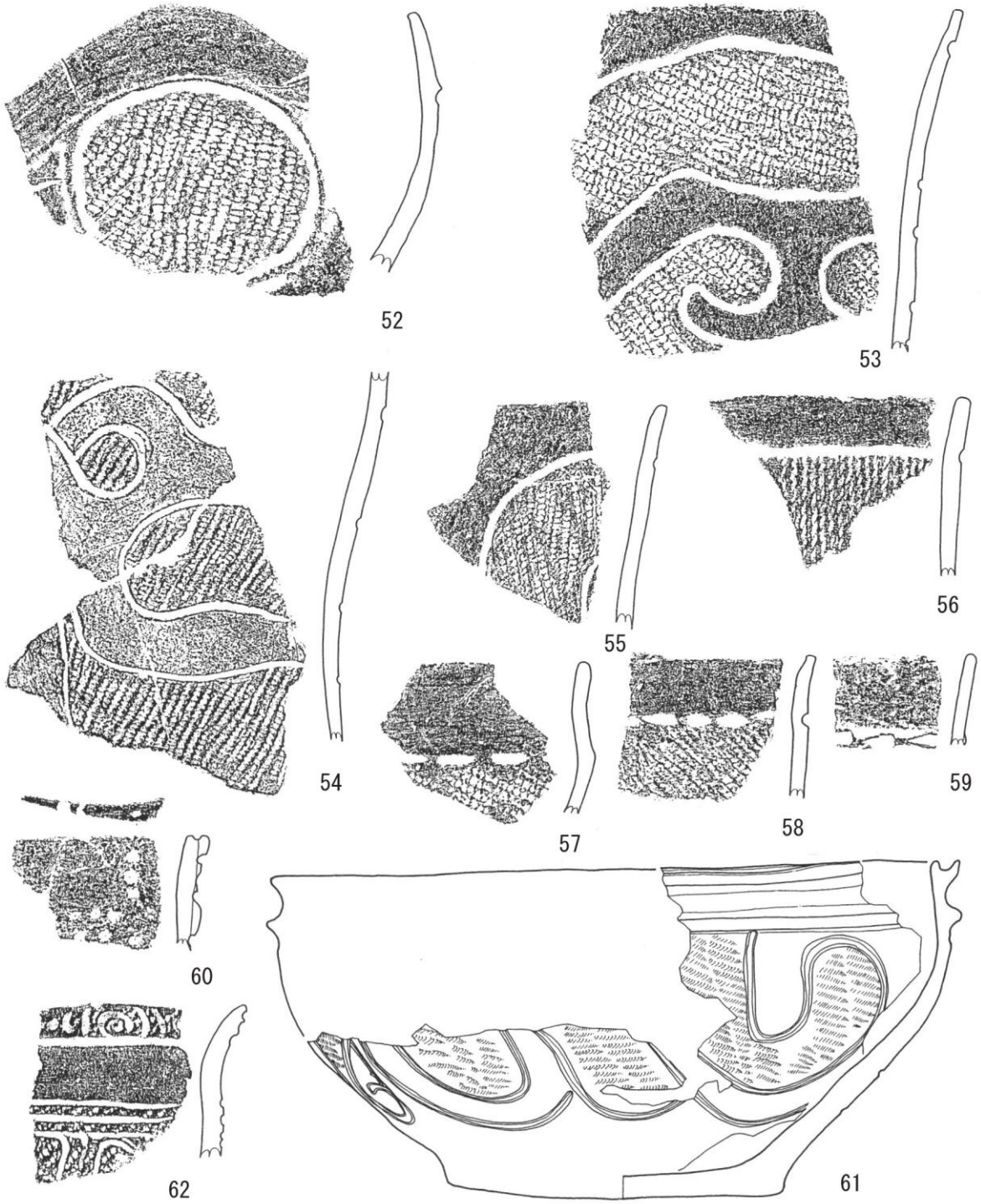
第11図　門前貝塚第６号貝塚第４区出土遺物（４）



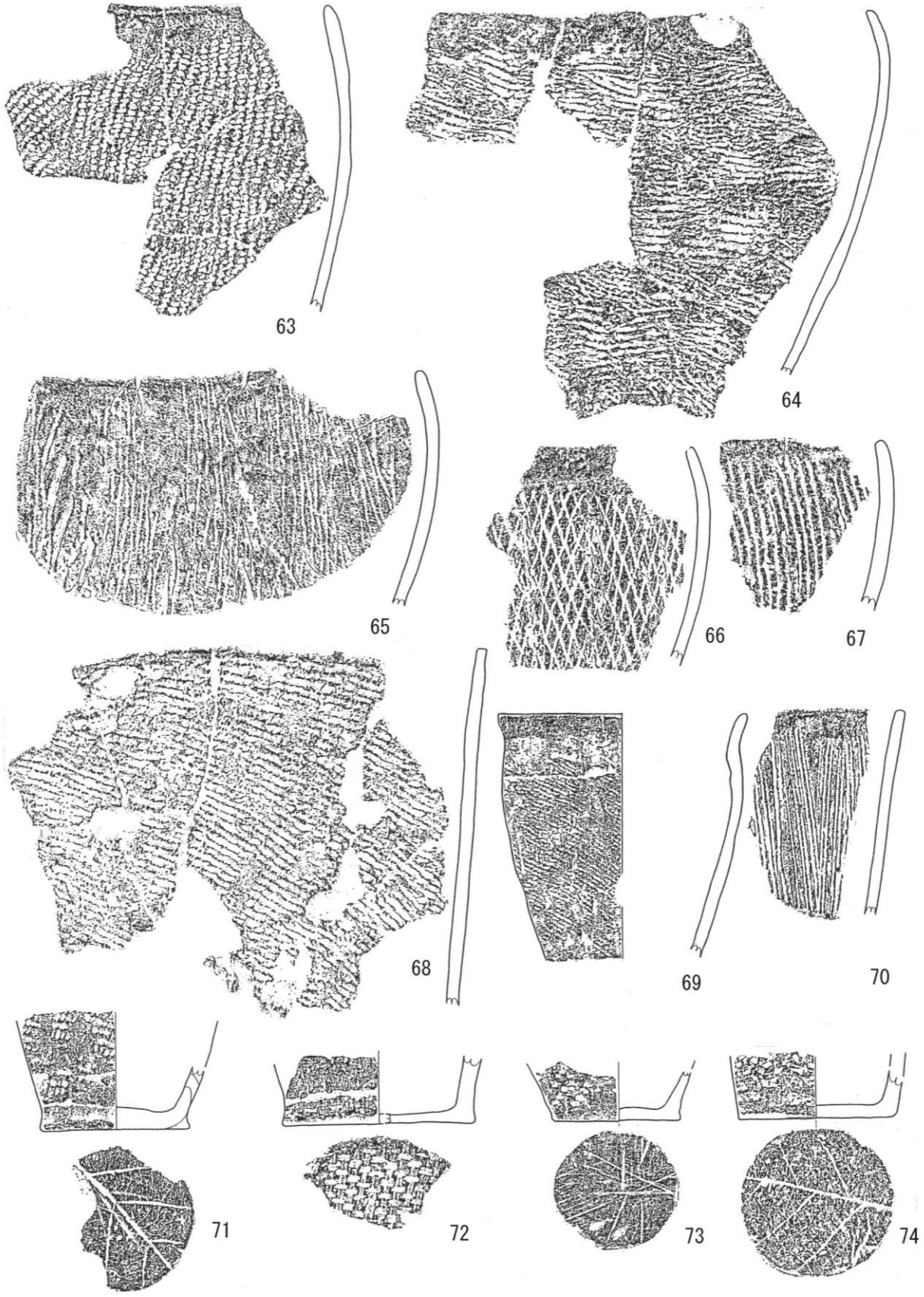
第12図　門前貝塚第６貝塚第４区出土遺物（５）　0　1：3　10cm



第13図　門前貝塚第６貝塚第４区出土遺物（６）　0　1：3　10cm



第14図　門前貝塚第６貝塚第４区出土遺物（７）　0　1：3　10cm



第15図　門前貝塚第６貝塚第４区出土遺物（８）　0　1：3　10cm

盛岡市遺跡の学び館所蔵考古資料図録Ⅰ
－昭和 29 年度陸前高田市門前貝塚発掘調査出土土器の集成－
2009 年 3 月 7 日　発行
発行・印刷　盛岡市遺跡の学び館
〒020－0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1
電話　019－635－6600　　ＦＡＸ　019－635－6605